

## 式 辞

本日ここに令和5年度、東北文教大学山形城北高等学校の入学式を挙げるに当たり、ご来賓の皆様をお迎えし、保護者の方々とともにこのように盛大に新入生の皆さんを祝福できますこと、私も教職員にとりましても、この上ない喜びであります。

ただ今、入学を許可いたしました386名の皆さん、ご入学おめでとう。

皆さんは中学の3年間、新型コロナウイルス感染症が広がる中、様々な制限を強いられることの連続であったと思います。それだけに、本日から始まる高校生活に大きな期待と希望を抱いていることでしょう。本校としましては、高校生年代というのは様々な体験が成長へとつながるということを念頭に置き、ポストコロナ時代にふさわしい新たな教育を進めてまいりたいと考えております。

さて、本校は大正15年、今から97年前、山形裁縫女学校の設立に始まり、その後幾度か校名を変え、昭和23年、学制改革により山形城北女子高等学校となり、平成14年に山形城北高等学校と校名を変更し、男女共学としました。そして昨年、校名に東北文教大学を冠し新たなスタートを切りましたが、これは東北文教大学及び短期大学部、そして大学付属幼稚園とともに、県内唯一の総合学園である学校法人富澤学園が運営する学校として、その総合力をさらに発揮することを狙ったものです。

その富澤学園の土台となるのが「敬愛信」という建学の精神です。創設者である富澤カネは、回顧録の中で、「どんなに時流が変わっても、人間として生きるため、これだけは変わるまい、と突き詰めて考え生まれたのが「敬愛信」である。人を敬い、人を愛し、人を信じる。またそれは、人に敬われ、愛され、信じられる人間になってほしいという願いが込められている。」と述べております。

さて、皆さんは高校で新学習指導要領が始まり2年目の入学生となります。本校のアカデミック探究、キャリア探究、スポーツ探究の普通科3コースでは、1年次はコースをオープンにしたクラス編成とし、特進科では土曜日の授業を課外講座とし、部活動や校外活動に参加できる体制を整えました。これらは、今の時代に最も大切だと言われる多様性の理解と尊重、それは多様な人々と関わることで育まれるという強い信念に基づくもので、本校では個性と多様性を尊重し、誰とでも対等の立場で協働できる人間の育成を目指しています。そして、これがスクールミッションである「敬愛信」の本質です。

ところで、今は苺狩りのシーズンですが、苺狩りで食べる苺はどうしてあんなに美味しいのでしょうか。勿論、採りたてでフレッシュだからという理由もありますが、実は苺を自分で選んで自分で採ったという行為そのものが美味しさを倍増させてくれるのです。人から与えられたものではなく、自分が選択にかかわったという行為には、主体性という重要な要素が含まれます。人参が嫌いだった小学生が、学校菜園で栽培した野菜の収穫を機に食べられるようになったという話はよく聞きます。ここにも自分が育てたという主体性が関わっているわけです。

このように、教育において主体性は極めて重要で、本校では、多様性、協働性を含めた3つを教育理念の柱にしています。ところが、コロナ禍では一律の行動を求められることばかりで、そこに主体性の入り込む余地はありませんでした。例えば、これまではマスクを付けることが決まりで、付けるか外すかの判断は求められませんでした。先月から自分で決めて良いことになりましたが、本心は外したいのに周りが付けているので外せないという人もきっと多いに違いありません。主体的

な行動には、時に勇気も必要になります。そして、莓狩りの莓が美味しいように、主体性は自己肯定感を向上させ、生きる喜びを与えてくれます。高校では、学習も部活動も校外活動も、すべてのことに主体的に関わることを心がけてください。

ところで、ようやくコロナの収束が見え始めていますが、それはマスクやワクチンのおかげというよりは、時間の力のおかげだと考えられます。科学の力は偉大ですが、時間の力も相当なものだということが分かるでしょう。

これからの高校生活、当然のことながら悩み、不安になることも多いでしょう。それは青年期の特徴とも言えます。しかしながら、インターネット上でのSOSの発信は、時として命までも奪ってしまうことがあります。自分の力が及ばぬ時は信頼できる人の力を借りる。それでもダメな時は時間の力を信じることです。このことは、いつも心の片隅に置いてほしいと思います。

保護者の皆様一言ご挨拶申し上げます。本日はお子様のご入学、誠におめでとうございます。

先ほど述べた主体性については、家庭教育の中ではなかなか育成が難しいものです。それは、自分で判断できない赤ちゃんの時から一緒にいるため、幾つになっても親が判断してしまいがちになるからです。したがって、青年期における親離れ・子離れは、本来は選択権を子どもに委ねるということを実に親が始めなければなりません。高校入学というのは、まさにそのタイミングと言えるでしょう。

そして、これからの3年間は人生の方向を決定する大切な時期でもあります。私たち教職員は、お子様が、自らが進むべき道を自分の力で切り拓いていけるよう、全力を尽くし支援して参ります。そのためにも、学校と家庭が相互に信頼しながら、子どもたちの背中を押し、倒れそうになった時には共に支える立場として協力し合いましょう。

結びになりますが、このやまぎん県民ホールを設計したのは本間利雄設計事務所で、本間氏は建築家人生の集大成として取り組んでいましたが、その完成を見ることができずに天に召されました。東北芸術工科大学や山形市スポーツセンターなど、山形の景観とマッチした数々の建築物を遺しました。小国町生まれで、子どもの頃から絵を描くことが得意だったそうで、自伝の中でこんなことを述べております。

私の歩んできた道は、長い歴史というより、一本の道だった。大好きな建築を、苦勞しながら、また楽しみながら図面を描いてきた。それは少しでもいい建築をつくりたいという、一筋の道程だった。

本日、高校生活のスタートラインに立った新入生が、個性豊かな仲間と切磋琢磨しながらも楽しむことを忘れず、得意なことの先に進むべき道を見つけてくれることを期待し、式辞といたします。

令和5年4月7日

東北文教大学山形城北高等学校

校長 大沼 敏美